



福祉と住環境を考える ふくてっく

2003年11月
第55号

特定非営利活動法人
ふくてっく

559-0034大阪市住之江区南港北2-1-10 ATC ITM棟 11F Iビル
TEL/FAX 06-6614-6800 ホームページ http://www.osakacity-vnet.or.jp/link/hukuteku/



キッズプラザ 手づくり木工ひろば

9月21日(日)
ここ、キッズプラザの「手づくり木工ひろば」は前回まで5階の小スペースでの開催でしたが、今回からイベントホールを特設会場にしていたら、ゆったりにスペースで実施されることになりました。今回はA組20名、B組20名の2回開催で、「汽車型えんぴつ立て」作りに取り組みたいだけでした。
親子で参加の各組とも完成めざして真剣です。さすがに直径0mm丸太をノコギリで切る作業にはチョット苦戦、でも皆さん頑張ってくれました。
ふくてっくスタッフも所定の時間内に完成できるよ



うお手伝いに大忙し、みんなの出来上がりを見て「オーやれやれ。」怪我もなく手づくり木工を楽しんでいたほっとしました。みなさんご苦労さまでした。
あとになりましたが、キッズプラザ企画課の皆さんには開催前の準備から大変お世話になり、本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。
ふくてっくスタッフ



フ 杉浦・平松・中北満・長岩・阿部・池端 (木工部 池端 一義)

東淀川区民まつり

9月21日(日) 東淀川区民まつりの木工教室に有馬さん、葛西さん、光川が参加しました。区社協からは10名余りのボランティアが参加、狭いテントの中、子どもたちも楽しんでいました。準備ができていたの



で作業も早く3時過ぎには用意していた50名分が終了し、後から来た人は気の毒でした。
ノコギリを新しくしたのでスタッフがよくケガをしたのが問題でしたが、子どもたちは作品を大事そうに

講座報告

大阪NPOセンター主催

NPO起業、就業コース
「福祉団体(住環境)の活動事例」
9月3日 講師 杉浦史郎
受講生の感想

・老後または身体が不自由になった場合には、家の増改築が必要になってくるのを身近に感じました。
・先生の暖かいお人柄がにじみ出るような講義、大変興味深く拝聴させていただきました。
・身近な生活環境をコーディネートする難しさを感じた。いろいろなサンプル真が参考になりました。
・「物づくり」NPOであるだけに、運営の仕方やサービスの方法もいろいろ工夫されていて、すばらしいと感じました。私も考えていきたいと思います。スライドはアイデア満点でもしよかったです。

ふくてっく10周年記念イベント

ボランティア・市民活動フェスティバル in おおさか
10月19日(日) 大阪城公園 太陽の広場

日頃から地道な活動を続けてまいりました「ふくてっく」は今年7月、誕生して10年を経ました。ふくてっくを力強く祝ってくれたような秋晴れの日、10周年記念イベントを思いっきり発信できるステージを迎えました。
1年以上前からいろいろと検討し、開催に向け皆な忙しい中、なんとかやりくりして準備してきたのです。朝早くから現地集合のみんなの顔が生き生きとしており、会場の準備も手際よく順調に進行していきま



交流サロンで親睦を深める

さあ其々用意の各コーナー、一緒にスタート。チャレンジコーナー「オリジナル手描きバッグ」山岡リーダー、「竹製うぐいす笛」平松リーダー、「木製つぼおし(ふくらうマスケット付き)」有馬リーダー、開始早々から大忙しでした。一方、定番の「子ども木工教室」の方もお昼を過ぎてからはテントせましの大盛況。



⇒住宅改修相談コーナー



⇒手描きバッグ

「住宅改修相談コーナー」では3組の相談があり、畑さんの親切丁寧な対応により、相談者も安心した様子でした。
あとになりましたが記念事業のもう一つの柱、「ふくてっく10周年記念誌」は10月1日に発行致しました。ふくてっく発足以来の活動内容を詳しく紹介しています。是非ご覧下さい。

・楽しいお話がありがとうございました。有償のボランティアは当然だと思えます。組織を継続していくには資金が必要ですし、経営力、企画力はとても大事なことだと思えます。非営利、営利にしろ、収入(利益)がないとやっていけないのですから。
・時には笑いを交えて、楽しい講座がありがとうございました。住環境(高齢者、障害者に対する)のきめ細かい対応ぶりに感心しました。有償ボランティアでありながら、一の営利会社には無い支援心を感じました。
・義務感、使命感とが表に十分出ており、今までのNPOの講義で重苦しい感じがしていましたが、それらを十分持ちながら、活動を

定例会のお知らせ

日時	場所	講師
12月 12月6日(土)午後1時 30分~5時	大阪市立社会福祉センター 会議室	痴呆性高齢者を取りまくバリアとは・・・ 鈴木 美佐氏
1月 平成16年1月10日(土)午後1時 30分	ATC(定例会の後、新年会を行います)	テーマ未定 金井 謙介氏

大阪府職業リハビリテーションセンター
関西医科大学病院 ソーシャルワーカー



↑竹製うぐいす笛



↑木製つぼおし

「ふくてっく」10周年 バンザーイ「私たちの地道な活動をご支援いただいた皆様に心より感謝致します。
さあ今日からまた新しいスタート15周年、20周年・・・まだまだ若い集団「ふくてっく」
この記念事業の開催に当たり皆様のご協力、本当に
実行委員長 池端 一義

小さくちゃん

萩野光



「大阪住まいコムネット」始動開始!

まちづくりは 人づくり



9月定例学習会
平成5年9月6日(土)
岡村 悦治 氏

* かつて、家は「建てる」「構える」といったものが、昨今では「買う」という。まるで物品を購入するように。人々が住んでいるまちに抱いている思いの希薄化を象徴している。

さて私は環境学習の資料づくりという業務を委託されたが、そこにまちづくり活動という要素が不可欠だと考えて、全国の注目すべきまちづくり活動を探訪する機会を得た。共しているのは、住んでいる地域をどれほど思って活動しているかがポイントであることだ。以下にそのいくつかを紹介する。

NPO法人「いびがわ」は、都市で企業務めをしてきたある人が、ふるさと川の汚れをもとに戻そうと、当初10人で運動をはじめ、やがて200名の賛同者を得て、ついには河川の清掃を1000人が参加する年中行事にしてみました。その際に住民の意識啓発にとつた手段は、「釣り大会をしよう」といった簡単なことであった。また、ごみを集積する溜まり場を「エコステーション(環境の駅)」と名付けたのである。

最初は運動資金もなかったが、企業の持っている道具を出させたり、商店街の空き店舗を活用するなど、したたかな工夫を凝らした。また市民ベースだけでは限界があるとみるや、町行政を取り込むことも忘れない。この場合に大切なことは町に何かを要求するというより、町も施策の遂行上助かるといった前向きなパートナーシップを築くことだ。

屋久島は昭和50年代には人口2万3千人を数えたが、高度経済成長時から人口流出が続き、現在では1万4千人になっている。初期の離島者は屋久島には自然があるだけで、文化も

何も無い事に引け目を感じていたものだが、今では屋久島の自然に誇りをもっている。屋久島の「環境文化村構想」というものは、当時の鹿児島県知事の賛同を得てスタートしたものであるが、運動を支えているのは実は島外から移り住んだメンバーが中心になっている。

その手法には3つの柱があつて、1つは、地域に住む人が地域づくりを考える。2つは全国からインテリを集めてコンセプトをつくる(自然遺産の登録などもここから発案された)。3つは、行政としての企画や事業化を組み込む。というものである。他に類を見ない特徴として、例の地域興しではなく建物や制度をつくつて達成するものだが、ここでは超長期で取り組んでいること。すなわち、創って終わりというのではなくエンドレスに活動するということだ。

次に、先導事業として採用されたのがハードづくりでなく環境学習というソフトであった事だ。活動のヘッドは島外から移り住んだ人だが(そういう人の方が市民活動のノウハウにじていて)、行政とのパートナーシップが見事だ。一的

には、行政になにをさせるかとか、市民でできる事の限界とかが論じられるのだが、これからの市民活動はそんなことではいけない。京都府丹後町では、かつて府が大口ゾーンを開発しようといふんだが、その後の経済情勢の変化で、立ち往生していたところ、市民参加型の公園づくりにむけて、公園の使い方の知恵を集めようと「地球デザインスクール」を開校している。地域の人がどつぷりとつかつて、これにヤマハやイナックスなどの企業がそれぞれの技術を活かして参加する。そうすると、その担当者がまたのめり込んで行く。

やるうとする人がやめずに続ける事が最大の秘訣だが、それを支えているものが、とにかく白いこと、遊び心の愉しさ、未来を感じる心地よさであり、またメーリングリストやHPによる情報開示が行き届いていて、しばらくご無沙汰でもすぐに馴染めることだ。

また、事業を行政だけで進めると、アイデアがお金にならぬ(垂れ流しになる)所をNPOが介在することで収支バランスが機能して事業展開が自由になる。

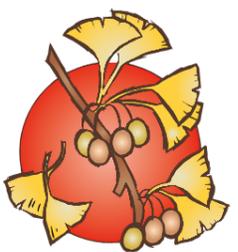
大阪の平野郷は平安以来1200年の歴史を持ち、戦災を受けたのは戦国時代にまで遡る(近代戦争の被害がない)。昭和5年に路電車の廃止に反対する運動が契機となって「街並み保全事業」が始まり、市のプロジェクトにもなっているが、市民は市の事業に「協力」している気持ちはなく、あくまで「参画」しているのである。

平野は、もともと7名の取り締まりが采配する(代官もいない)自治の町であった。そうした伝統は消しがたいDNAとして残り、物腰柔らかな中にプライドを秘めている。だから活動には主体性があり、とにかくしたたかだ。路電車の廃止を覆すことはできなかったが、「駅の葬式」なるイベントをしてメディアの注目を集めたり、行政とのやりとりも上手で、「皆で税金を取り戻そう！」が本音なのだ。

誰が何のために活動するか、その何かが問われる所であり、そこに地域性が生まれる。すなわち、「地域」や「まち」は住み手の心を表すものである。地域に根をはやして生きてゆく者が考え、住み手が権利と義務を併せ持つて住むこと

が大切だ。それには価値観を共有することが欠かせない。ところで、活動家たちの家庭を覗くと、子どもたちも2パターンあることに気づく。親の活動に全く無関心な子どもと、共感している子どもにれるのだ。この活動が2世紀後半にまで継続できるかどうかはこの子達にかかっている。続けていく事こそが命だが、それには白さが要だ。知恵を絞って楽しむ。これが究極の遊びといえるのではないが。

私はいま北摂丘陵で計画されている「都」に関わっている。ただのハード造りに終わらせずに、まちに永続的な息吹を吹き込むにはひとつの工夫が必要だ。NPOの設立を提言している。是非ふくてつとも加わって欲しいと思う。(記 中北 清)



日本における レスキュー犬の 活躍とその育成



10月定例学習会
平成5年10月4日(土)
日本レスキュー犬協会
石井 勝治 氏

レスキュー犬協会発足の経緯から話を始める。1995年1月1日ご存じのり阪神大震災があり、神戸市東灘区に住んでいた友人が命を亡くした。あの時、フランス・ドイツ・オランダなどから救助犬派遣の申し出はあったが、日本政府は「前例がない」と迅速な対応ができず、検疫に2週間もかかる具合で、それでは意味がなくなると結的に申し出を断る事になった。3日(人命救助は3日が限界と言われている。)そんな中、スイス隊は独自のルートですぐに

活動することができ、その活躍がやがて、日本レスキュー犬協会の発足につながるのである。

当時私は、会社の取引先の安否確認に奔走していたが、途中で目撃したレスキュー犬の活躍に心打たれた。ところが、警察関係者が小声で「実はあれはあんまり役にたたんだ」というのであった。犬の反応を得て掘り始めると、出てくるのはつぶれた冷蔵庫からの食物だったりして、いっこうに被災者の発見につながるからだ。それは、諸外国ではレスキュー犬の活躍の場は主として山岳であったり、また日本のようにやたらと食料を保持する習慣がないから、食べ物に反応すれば十分だったのである。日本はあまりにも食べ物豊富で、犬が誤差反応しづらい。ただ、犬でもあんなに頑張っているのだからと、大きな勇気づけをしてくれた意義は大きいものがあつた。

日本でも優秀なレスキュー犬を育てようという声をあげると、たちまちこの数名の応援者が現れ、スイスの指導も得て2頭の飼育から始めた。その年10月にメキシコ地震があり、世界中からレスキュー犬が集

まり、日本チームは早速5体の遺体を発見するという大活躍をして、指導してくれたスイス隊員にも驚かされた。先の震災時の教訓を活かして、我が国では食べ物ではなくボールを持たせて褒めるといった独自の訓練法をとつたのが功を奏したのである。

その後、三田市でさらに6頭を加えて8頭の訓練が始まったのである。訓練には月に5〜800万円、年間では約1億ものお金がかかる。メンバーはいつしか私財を投じて一生懸命になつてしまい、3頭の優秀なレスキュー犬を育てることができた。

翌年2月にペルー地震があり、私たちは募金に奔走してなんとかペルー救援に参加することができたが、この時隊員は寝袋とカップ麺という有様。立派な装備で活動するスイスやフランスの隊から、なんで日本隊は資金がないのかと不思議がられたものだ。イギリスなどでは年間3億円の寄付が集まるらしい。この時はフランスの支援を得ることができて(フランス隊の日本犬として)活動したのだが、残念な事に現地軍隊の規制が厳しく、実効ある活躍はできなかった。

帰国するとすぐに長野県で土石流があり、怪我をした1頭を除く2頭で参加し、見事に遺体の一部発見につながり活躍をして、これが国内でレスキュー犬の評価を得るきっかけとなった。おかげで想像を超える募金が集まったので、本格的な訓練センターを造る事になり、1997年に着工した。続いて同年7月に鹿児島出水市でおきた土石流でも1遺体を発見し、マスコミにも大きく取り上げられたので募金者からも大いに喜ばれたのである。

三田市のトレーニングセンターができて3年目に、フランスへ認定検査をうけに出かけ、合格した8頭頭の上を独占し、世界が驚く結となった。現在は8頭を飼育し、いつでも3頭はベストコンディションで世界中に飛べる体制になっている。

1999年は世界で災害が多発した年となった。6月広島で土砂崩れ、8月トルコ大地震(1万5千人死亡)、9月台湾地震(2千400人死亡)、二月トルコ(400人死亡)。

トルコでは、地震直後は無政府状態の中、群衆が暴徒化して隊員も犬も生命の

危険さえ覚えたが、やがて軍隊が救援してくれたので、この時始めて生存者の救助を成し遂げることができた。後で知ったが100年前に和歌山沖で遭難したトルコ船を現地の村民が誠心誠意助けた縁があつて、トルコは大変な親日国であつたのが幸いなのだ。

その他「体もの遺体を発見するなど大活躍だったの」で、日本では小さな記事だったが、世界的には大きなニュースとなった。台湾では、日本隊は地震発生わずか8時間後の到着という早業を演じ、世界を驚かせたが、残念なことに現地軍隊の指揮下で行動することを余儀なくされ、他国隊の到着を待つため、1日半の足止めを喰うこととなった。おまけに軍が救助活動対象を区別し(特権階級の優先)、救助隊や市民を被災地から遠ざけて指揮したのである。我々としては肝心の重機をすべて軍がおさえているものだからどうしようもなく、悔しさのあまりこれを機に救助隊を辞める隊員がでてしまった。

沈み込んでいる間もなく再びトルコ地震があり、5頭を派遣した。この時は幸い被害も前回ほどではなく、大きな成をあげるに

は至らなかつたが、事後、トルコ政府から熱い感謝のメッセージが寄せられ、日本政府も評価するようになったのである。

2001年にはインドで2万人が死亡する大地震があつたが、この時我が隊の犬ががれきの下で苦しむ女兒の声に反応しながら、他国隊の犬が反応しないなどの事情で見放され、隊員のルールを逸脱(独断行動)してまでの努力も空しく生還させる事ができなかった。発見はできて救助活動のための重機を持た空しさが、また優秀な隊員を辞めさせることを招いてしまったのである。

犬は石器時代から人間と共同生活をしてきた動物で、犬にとっては人間も犬の仲間である。群をつくる動物の習性としてリーダーに従う事が大好きで、まるで家族の、しかも主人のようにかわいがらうな飼いは、かえってストレスを与えてしまう。飼う以上は、家族全員で犬を正しく理解して、愛情と責任をもって、最後まで飼って欲しい。

(記 中北 清)